

キルケゴールとカフカ

—婚約をめぐる—

金子 琢磨

I

F. カフカ (1883—1924) の S. キルケゴール (1813—1855) 読書は、1913年に始まり、断続的に1922年まで続くのである。この間、キルケゴールはカフカにとって人生の指針と慰めを与える良き助言者であり、また自らの思想的立場を決定する上で対決すべき存在であった。いずれにせよ、カフカの生涯を語る時にはキルケゴールを避けて通れない程に大きな作用を及ぼした人達のひとりと言えるだろう。両者はそもそも人生、テーマと問題、モラル、超越的なものへの思考、恐怖を与える把握しがたいものの倫理的・神学的重要性に対する感覚等においてよく似ているのである。

前述のように、カフカがキルケゴールを読んだのは1913年8月からであったが、この頃彼は人生の重大な選択に迫られていた。ちょうど1年前に友人宅で紹介されたベルリン在住の女性、フェリーツェ・パウアーとの交際が今婚約すべきかどうか、決断の時になっていたのである。彼はフェリーツェに対する初対面の印象を次のように書いている。

「……彼女は、……どうみても女中の様に見えた。僕は、……直ぐ彼女とうちとけた。間のびした感じをはっきり表わしている骨ばった、締り

のない顔。開いた襟元、ゆったりまとったブラウス。ひどく世帯じみた恰好に見えた。……ほとんどつぶれた鼻。ブロンドのやや剛い、魅力のない髪。がっしりした顎。……僕はもう確固たる判断を持っていた。』¹⁾

「確固たる判断」とは、その翌月にフェリーツェに交際を申込みのだから彼女を結婚相手として考えたということである。しかし、この初対面の印象についての記述は、悪意をもってしたかのように思われる欠点の羅列になっているにもかかわらず、「確固たる判断を持っていた」ところに彼の結婚問題の特異性がある。性的魅力に乏しい女性こそ彼の求める人生の伴侶なのであり、我々が欠点と呼んだものが彼にとって魅力であった。性の介在しない共同生活、これがカフカが願望する結婚計画であった。彼は肉体、性そして性行為の結果としての子供に対して彼自身説明しがたい羞恥、嫌悪感を持っていた。フェリーツェ宛の手紙には、父親になることの拒否が再三にわたって書かれている²⁾。さらに次のようにも言われている。

「同棲の幸福に対する罰としての性交。出来るだけ禁欲的な、独身者よりも禁欲的な生活をする事、これが僕にとって結婚生活に耐える唯一の可能性である。しかし、彼女はどうかだろうか。」³⁾

さて今ひとつ彼に結婚を躊躇させるのは、共同生活そのものによって「書くこと」が妨げられるという可能性である。カフカにとって文学は「僕の唯一の使命」⁴⁾であったが、その「使命」の達成には孤独が不可欠と考えていた。結婚生活において日常の生活が彼を飲み込むことになれば、「書くこと」即ち生の図式が崩壊してしまう。それゆえ彼にとって最上の方法は、ベルリンに住むフェリーツェとプラハのカフカの間を手紙が頻りに往復する現在の状態が永続することである。彼は1日に2通、3通の手紙を送り、彼女にも同数の返事を求める。彼女の日課、オフィスの様子と仕事、交友関係、読書、家庭等要するにフェリーツェの生活全体にわたる詳細な情報を要求する。それによって構成された彼女の存在と生活は、彼の想像力の中で現実以上に現

実的な生命を得るのである。結婚生活という現実には彼には閉されているのだし、例えそれが現実となったとしてもその直接性は彼に苦痛しか与えないだろうからである。彼女との手紙を通しての仮構の共同生活は、現実の生活がそうであるように、昨日と今日が全く同一のものだとしても日々新しく補われなければならない。それがフェリーツェに文面のない手紙でさえ毎日要求する理由なのである。カフカはそれによって彼女の健全で活動的な生活を、カフカ流に言えば生き血を吸って生きているのであり、文学の糧となるのである。

1913年7月にはフェリーツェも結婚を決意する。しかし1ヶ月前に求婚したカフカの心が揺れている。その前に彼女に是非知らせておく必要があるのだ。

「……僕にとって最良の方法は、筆記用具とランプを持って、広々とした隔離された地下室の最も奥の部屋にすることでしょう。食事が運ばれ、いつも僕の部屋からずっと遠くに、地下室の最も外側のドアの背後に置かれます。食事のところへ行く道、部屋着で地下室の丸天井の下を全部通って食事を取りに行く道が僕の唯一の散歩なのです。それから僕は自分の部屋に帰って、ゆっくり慎重に食事をし、すぐまた書き始めるのです。」⁵⁾

フェリーツェとの結婚生活の不可能を間接的に述べているのだが、ここには後年の作品「巢穴」の外界と遮断された孤独のイメージがある。普通の市民生活にある彼女には想像さえつきかねたであろう。想像の域を超えたものは一般に何物をも意味しないのであり、彼女はそれが独身者の孤独癖であって結婚生活によって治癒しようと思ったであろう。フェリーツェに結婚を断念させようとするカフカの作戦は失敗に終わるのである。孤独の中から文学を引き出す作家カフカには、この事態は文学の、したがって彼自身の危機であった。

我々はカフカの結婚に対する拒否的姿勢を少し強調すぎたかもしれない。実

際にはある意味では結婚に対して文学以上に高い価値を置いていたことも付言しておかなければならない。

「結婚して一家を構え、生れてくる子供たちを全部引き受けて、この不安定な世の中で養い育て、できれば少し導いてやること、これが僕の確信しているところでは概して1人の人間の達成しうる限りでの最大限のものです。」⁶⁾

カフカの悲劇は、「唯一の使命」である文学を守るために強要される独身主義と、人間としてのカフカに要請される最高善との相互に対立する両者に追い立てられ、引き裂かれているところにあった。

II

「僕は今日『士師の書』を手に入れた。僕が予期していたように、彼の場合は僕のと本質的に違っているにもかかわらず非常に似ている。彼は友人のように、僕の正しいことを裏書きしている。」⁷⁾

これは、カフカがキルケゴールを初めて読んだ際に記したものである。『士師の書』とはキルケゴールの日記の抜粋のドイツ語訳であって、彼の憂愁、個性、婚約、キリスト教についての見解を章立てにして編集されていた⁸⁾。カフカはその後生涯にわたってキルケゴールの主要者作の大部分、『あれか、これか』⁹⁾、『おそれとおのき』、『反復』、『人生行路の諸段階』、『瞬間』を読んでいた¹⁰⁾。『死に至る病』、『不安の概念』は読んだか否かは不明だが、蔵書に入っていた¹¹⁾。1983年の時点でカフカが留保をつけながらも「友人」と書いているのは、キルケゴールの婚約問題に関しての内的葛藤とそれに対する決断のためであることは容易に理解される。カフカはキルケゴールに共通した苦悩の問題と、従うべき先例を見たのである。

キルケゴールの不幸に終わった婚約は、1940年から翌年10月までの1年あま

りの期間であるが、その間にキルケゴールが送った手紙が32通残っている。愛の証しの手紙は、聖書、プラトンの『饗宴』とドイツロマン派の詩人達、アイヒェンドルフ、アルニム、ブレンターノの詩句があり、しばしばペン画が添えられている。だが、彼はただちに自分の婚約が誤りであることに気づいたのだった。

「しかしもうその翌日、僕は自分が間違えたことに気づいた。ひとりの懺悔者でしかない僕、僕の前歴 (vita ante acta)、僕の憂鬱、それで十分だった。」¹²⁾

レギーネは、キルケゴールの死に至るまで心を占めていた唯一の女性だったし、彼の著作活動は彼女に捧げられている¹³⁾。それ程深く愛したレギーネとの結婚を妨げた「懺悔」、「前歴」、「憂鬱」とは何か、婚約解消の真の理由とは何か。

「私が心の最内奥に秘めているその説明、その具体的説明は、……私にとっての恐怖を含んでいるものであり、そのようなものを私はどうしても記すわけには行かないのだ。」¹⁴⁾

我々は、キルケゴールのこの秘密については諸説あることを知りながらも¹⁵⁾、彼の家族の血の中に一つの宿命をみる罪意識を取りたいと思う¹⁶⁾。

キルケゴールの父ミカエルは、農奴の中の最も低い身分に生れ、荒野の羊飼いかから身を起こし、毛織物商として巨万の富を得た人であった。最初の妻の病死後再婚したのだが、その結婚式後4ヶ月目に第1子が生れた。その家の女中を暴力的に犯した結果の結婚だったのである。キルケゴールはこの母の7番目の末子であるが、彼の兄弟姉妹は長兄を除いて全て33歳、即ちキリストの死んだと言われる年齢に達せず死んだ。父は結婚式の2ヶ月前に40歳で、事業の隆盛にもかかわらず隠退した。元來信仰の篤い父は自己の罪責の深さを悔い、人生の幸運さえもやがて下される神の罰を一段と厳しいもの

にするものと理解した。罪の意識は生来の性格を助長して憂鬱となり、息子セーレンに植え付けられる。彼は贖罪のために、敬虔な生活を送り、神学書、哲学書き読み、秀れた牧師たちと交際したが、子供たちを神に捧げる決心をしていたので宗教教育は異常な程に厳格だったようである。セーレンは後年次のように言っている、「僕は宗教的な意味では、すでにもう子供の時に婚約していたのだ。」¹⁷⁾ 彼は父から母との関係における罪を聞いた時の衝撃を「大地震」と呼んだ。

キルケゴールが記した先の「懺悔」、「前歴」とは、レギーネとの婚約前に犯した性的享楽と思われるが、彼の意識の中では自分の罪と父に見出した罪が重なり合い、一族には恐るべき宿命があること、父と自分に共通な罪、それが神より課されているのだという確信に至るのである。結局のところレギーネとの結婚に際しての本質的障害は「憂鬱」であって、それはキルケゴールの両親の関係にある秘密、その関係から生じた自分の誕生についての拭いがたい宿命論的罪責感と宗教的恐怖である。

キルケゴールのレギーネに対する愛は、終生変わることがなかった。婚約解消の8年後、今は結婚しているレギーネの夫宛に彼女との交際の許可を求めて書く。

「この世においては彼女は貴殿のものです、歴史においては彼女は小生と並んで行くでしょう。永遠においては彼女が小生をも愛することは、貴殿のさまたげとはならないでしょう、その小生は彼女との婚約の時代に既に老人であったのです。」¹⁸⁾

「人間的に言えば——そう確かに、そしてそう言いたいのはやまやまだが、彼女は僕の生涯において唯一の、そして第1位の優位を持ち、また持つべきなのだ——しかし神が第1位の優位を持っている。」¹⁹⁾

彼の遺言状は、遺産の相続人にレギーネを指定していた。彼は婚約は結婚に等しいと考えていたからである。

カフカのフェリーツェとの交際は5年余にわたり、その間2回の婚約をして解消が行なわれた。その後さらに別な女性との間に3回目の婚約、解消、数人の女性との恋愛があったが、それは全て不可能な結婚への試みであった——死の9ヶ月程前に同棲生活を送った女性の例外はあった。あたかも解消するために婚約をするように見えるのだが、この無益な、絶望的努力の繰り返しは彼の結婚に対する価値づけを示すのである。彼の価値感全体はある宗教的思想によって支えられているので、結婚の試みもそのような関連で見られるべきであろう。彼は無神論者ではないが、ユダヤ教、キリスト教などのいかなる伝統的宗教にも属さない独自の思想を持っていた²⁰⁾。アフォリズムや実話、断片の形で表現されているので、彼の宗教思想の全体は把握しがたいのである。しかし次のようには言えるだろう。彼には彼岸——キルケゴールの場合の「永遠」が存在しないのである。一元的な此岸のみを信じるカフカには、「永遠」の世に生きる希望は閉されているために、現世における人間としての普遍的生、換言すれば結婚して共同体に所属することに執着せざるを得ないのである。彼にはまた使命の意識も欠けてはいない。「書くこと」に関して次のように言っている、「僕を利用しようとする、あるいは利用している或るより高い力があるとすれば、僕は少くとも明らかに作り上げられた道具として、その力の手の中にあるのです。」²¹⁾しかし、「より高い力」も、そしてそこから発せられる使命もキルケゴール程にはカフカを拘束しないし、確信を与えないのである。

III

キルケゴールとカフカは、Vafer = Gott というヨーロッパの歴史の上に神観念を作り上げている。

「結婚はなる程最大のものであり、何より名誉な独立を与えてくれますが、同時にそれはあなたと最も密接な関係にあるのです。ここから脱出しようとするのは、だから狂気の沙汰であって、そんなことを企てよ

うものならいずれ罰せられるでしょう。』²²⁾

これはカフカが父と不和になった時に書いた長い手紙の一部であって、作品ではない。それにもかかわらずこの手紙は、名宛人の父が単なるカフカの父以上のものと仮定することによってしか理解されないであろう。すでにみたように、カフカの結婚の障害となるのは実際には彼の父ではなく、相互に密接な関連にある性、文学、神である。カフカが罰せられるのは他ならぬ神によってなのである。この父親像の二重性、あるいは父的権威の二重性は彼の多くの作品に見られる。

キルケゴールは結婚の翌日にそれを後悔したが、カフカはフェリーツェに最初の手紙を書いた2日目には結婚の不可能を予感していたと言えるだろう。1912年9月22日の夜から翌朝にかけて一気呵成に書き上げられた作品『判決』では、婚約を告げる主人公が父親によって理解しがたい理由によって死刑宣告されるのである²³⁾。この物語は、カフカがキルケゴールを読む以前に書かれている。それが最初の構想を裏切って生れたことからすれば²⁴⁾、フェリーツェに会った瞬間に結婚についての「確固たる判断」を持ったカフカに対して、彼の無意識の中にすでに存在していた文学への使命が父の判決の形で警告を発したのだった。この小説には、父と子、彼等に共通の友人、そして息子の婚約者が登場する。婚約を告げる息子に対して、父はこれまでの父子関係を破壊し、父親を葬り去るものとして認めず、判決を下すのである。この場合父が息子の婚約の意志の背後に父に対する敵意を認めたとしても、息子はその判決に従わなければならない何の理由もないのである。息子がほとんど抵抗もなしに河に身を投げるという結末は、したがって両者の間のある暗黙の契約があったということになる。したがってこの父子関係は多義的なのであり、この小説はそれに対応した多層的構造を持っているのである。今カフカ父子と、神とカフカという父子関係を取り出せ、それは先の「父への手紙」の父子関係に置き換えられる。即ち、友人とはカフカの自我であり、婚約者フリーダとはフェリーツェのことだと解釈されるのである。小説『判決』の解釈には、『父への手紙』が重要な意味を持っている、後者もすでに作品化

して、それ自体が解釈を必要とするのではあるが。婚約者フリーダにはブランドンフェルトの姓が与えられているが、カフカはそれが彼自身の婚約者フリーツェ・パウアーといくつかの点で似ていることを認めている²⁵⁾。Friedaとは Friede (平和) に、Brandenfeld は「燃える戦場」に通じるのであり、この姓名は作品における婚約者の機能に相応しい命名であった。彼女の存在は父子の密接な関係に戦いを挑み、破壊して、主人公との「平和」と「幸福」を望む存在だからである。この命名はまた、カフカ自身の結婚に抱く期待と不安の2面を反映しているので、この作品において自己の使命を確認したことになるのである。

キルケゴールは父の死後に書いている。

「彼（父のこと—筆者注）が僕に残してくれたものの中で、父の追憶、父の変容した姿が……僕にはもっとも貴重なのだ。」²⁶⁾

「僕は父から父性愛がどんなものかを学んだし、そのことを通して神の父性愛、人生における唯一の揺るぎなきもの、真のアルキメデスの点の理解を得た。」²⁷⁾

すなわち天の父、あるいは父なる神の父性への変容が生じ、キルケゴールは父を通して神に対する絶対的信仰、神への奉仕の使命を確信する。しかし、カフカの場合と同様に、そのような確信、婚約の解消はただちにレギーネを断念するを意味したのではなかった。婚約破棄後に書かれた、彼の最初の文学的著作であった『あれか、これか』は、神への奉仕の実践ではありながら、レギーネへの隠されたメッセージでもあった。そこでは彼が直接言うわけにはいかなかった事情を間接的に彼女に伝え、彼めがこの著作の真意を見抜いて人間的、宗教的に高められ、再婚約の可能性が生れることを期待しているのである。

『あれか、これか』のテーマは表面的には結婚であるが、2つの相異なる人生の可能性を描き出し、読者に選択をせまり、決断させることを意図した

ものである。それは2部形式になっていて、第1部はAの筆者に、第2部はBの筆者の手になるとされる。Aはドイツロマン主義によって洗練され、種々の可能性を自己の中にみながら目的を持たず、人生を享樂的に生きる美学者である。彼には人生は無意味に思われるが、情熱的気分にかられた瞬間だけは生が意味を持ってくる。絶え間なく高揚と落下の気分を翻弄され、安定した気分の持続性はない。芸術、文学に関する評論の中から我々にとって必要と思われるものを取り上げてみよう。『影絵』においては3人の欺かれた女性、即ちゲーテのクラヴィゴのポーマルシェ、ドン・ファンのエルヴィラ、ファウストのマルガレーテについて考察される。真実の愛ゆえに犠牲になる運命の女たち、そこにはレギーネが投影され賛美されていると思われるが、他方ではキルケゴールとレギーネの場合との相異はある意味を持つことになる。この相異によってキルケゴールは自己の正当化と、レギーネとの新たな婚約の可能を示唆するのである。『古代の悲劇的なものの現代の悲劇的なものへの反射』では、罪の意識から生じる憂鬱と絶望に沈むアンティゴネに仮託したキルケゴールが、『輪作』では結婚生活における夫婦の永遠の愛の誓いを嘲笑し、『誘惑者の日記』では冷酷な知的誘惑者の仮面をつけたキルケゴールがその背後に見える。

Bの筆者は裁判官であるが、倫理的な家庭活者であり、人生の種々の課題の遂行にこそ人生の意味があると考え。第2部は、Bが美的生活者のAに対して批判的立場に立って書簡体形式で答える。Aの美的、感性的生活における激しい気分の変化の波の根底には倫理的層がある、それが抑圧される結果として憂鬱、絶望が現われる。絶望はしたがって後悔を通して善悪の区別に至る契機となる。こうして美的生活から倫理的生活への移行がなされるが、美的生活は描写されてあることにその美しさがあり、倫理的生活の美しさは日常生活にあるのだから時間を美しくすると言える。第2部はその最後に説教が添えられ、『あれか、これか』は結果としてあれでもなく、これでもなく、より高い次元の宗教的方向性を指し示している。

『あれか、これか』は、一方でレギーネを引き寄せ、他方で拒絶する矛盾、二者択一をせまりながら実際には第三者を選ばせる弁証的設定という、キル

ケゴールの著作の複雑な面を示すのである。

我々が『判決』と『あれか、これか』を並置したのは、それらが作者自身の問題と密接な関係にあること、それぞれの著作群の中に占める類似した位置を指摘したかったからである。第1に、それらが本格的著作の最初のものであること、詩人たちはそこで自己の使命の認識と共に、彼等の切実な結婚の問題——それは普遍的な実存にかかわる問題——を扱っていることである。第2は、その作品がその後続く作品を方向づけるという意味で記念碑的だということである。キルケゴールについて言えば、真のキリスト者を目指した次第に高まり行く生存の諸段階という一貫した方向性があるが、作品間における弁証法的対立関係というもう1つの方向性がある。作品『あれか、これか』には対立関係としての「あれか、これか」が立てられていたが、この著作にはほとんど同時に出版された『二つの建德的講話』が対立関係をなしている。同様に、匿名のいわゆる美的著作に対して実名の『講話』が並立され、著作間には「あれか、これか」の関係が設定されている。そして最終的に設定される「あれか、これか」は、『死に至る病』（永遠の地獄落ち）と『キリスト教における修練』（信仰による救済）である。

カフカでは『判決』の父子関係のテーマは『流刑地にて』、『審判』に引継がれ、そのヴァリエーションは『変身』、『アメリカ』等に現われる。『判決』には、その後の作品においてさらに強化されて展開される不可解さと恐怖が一体となった形式や、作品中の出来事を主人公の視点でとらえ、全能の語り手の視点を抑制することによって読者を主人公に仕立てる技巧がすでに生れている。キルケゴールのレギーネの場合と同様に、カフカの婚約者フェリーツェは『城』の Frieda、『審判』の Fräulein Bürstner、『アメリカ』の Brunelda 等の暗示的名で登場し、「歴史において」生きているのである。

注

- 1) Kafka, Franz: Tagebücher. Hrsg. von M. Brod. Fischer 1967, s. 204.
(以下 Kafka: Tb と略す)

- 2) Kafka, Franz: Briefe an Felice. Hrsg. von E. Heller u. J. Born. Fischer 1970, s. 82, s. 88 und s. 221. (以下 Kafka: Briefe と略す)
- 3) Kafka: Tb. s. 226.
- 4) 同上 s. 228.
- 5) Kafka: Briefe. s. 250.
- 6) Kafka, Franz: Brief an den Vater. In: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande und andere Prosa aus dem Nachlaß. S. Fischer 1953. s. 209f.
- 7) Kafka: Tb. s. 227.
- 8) Binder, Hartmut: Kafka-Handbuchd. 1. Alfred Kröner 1979. s. 523f.
- 9) Kafka, Franz: Briefe 1902-1924. Fischer Taschenbuch 1975. s. 224f.
- 10) 同上 s. 190 u. s. 253f.
- 11) Wagenbach, Klaus: Franz Kafka. Eine Biographie seiner Jugend 1883-1912. Francke 1958. s. 216.
- 12) Kierkegaard, Sören: Die Tagebücher Bd. 3. Ausgewählt, neugeordnet und übersetzt von H. Gerdes. Eugen Diederichs 1968. s. 302. (以下 Kierkegaard: Tb と略す)
- 13) 同上 s. 316.
- 14) 大谷愛人: 続キルケゴール青年時代の研究 (勤草書房) 昭43, s. 1580. (キルケゴールの日記の紹介からの孫引き)
- 15) 同上 s. 1622ff.
- 16) ヨハネス・ホーレンペーヤ (大谷 長他訳): セーレン・キルケゴール伝 (ミネルヴァ書房) 昭55, s. 130.
- 17) Kierkegaard: Tb. Bd. 3. s. 120.
- 18) セーレン・キルケゴール 大谷長訳編): 婚約—セーレン・キルケゴールの遺稿 (創言社) 1972, s. 148.
- 19) Kierkegaard: Tb. Bd. 5. s. 128.
- 20) Kafka, Franz: Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande. S. Fischer 1953. s. 121. 参照。
- 21) Kafka: Briefe. s. 66.
- 22) Kafka, Briefe an den Vater. s. 217.
- 23) 金子琢磨: F. カフカの『判決』—その構成と解釈—(アルテス・リベラレス 27号) 1980参照。
- 24) Kafka: Briefe. s. 394.
- 25) Kafka: Tb. s. 212f. u. Briefe s. 394.
- 26) Kierkegaard: Tb. 1. s. 158.
- 27) 同上 s. 246.

参考文献及びテキスト

カフカ関係

- 1) マックス・ブロート (辻, 林部, 坂本訳) : フランツ・カフカ (みすず書房) 1972。
- 2) ボワデッフル／アルベレス (白井健三郎訳) : フランツ・カフカ (理想社) 昭46。
- 3) 中澤英雄 : カフカとキルケゴール (千葉大学教養部研究報告 (A) 9) 1976。
- 4) Nagel, Bert : Kierkegaard. In : Kafka und die Weltliteratur. Winkler 1983。
- 5) エリアアス・カネッティ (小松, 竹内訳) : もう一つの審判 (法政大学出版局) 1971。

キルケゴール関係

- 1) キルケゴール著作集 (全21巻別巻1) 白水社1973。
- 2) H・ゲルデス (武村泰男訳) : セーレン・キルケゴール (木鐸社) 1976。
- 3) 大谷愛人, 泉 治典 : キルケゴール—死に至る病 (有斐閣) 1980。
- 4) G・マランック (藤木正三訳) : キルケゴール—その著作の構造 (ヨルダン社) 1976。
- 5) H・P・ローゼ (大谷 長訳) : キルケゴールの行路における謎の諸段階 (東海大学出版会) 1977。
- 6) 橋本 淳 : キルケゴールにおける「苦悩の世界」 (未来社) 1976。

(筆者 岩手大学人文社会科学部助教授)

〔付記〕 本稿は、昭和58年度総合科目 (東西文化の諸相A—愛について—) の講義原稿を整理、加筆したものである。